

大学構内における 交通障害者の心理

徳田克己

筑波大学心身障害学系講師

Katsumi TOKUDA

Assistant Professor, Institute of Special Education,
University of Tsukuba

私が籍を置く筑波大学には、障害のある、多くの学生、大学院生、留学生、科目履修生が勉学に励んでいる。特に、交通障害者とされる全盲者および車いす使用者等の肢体不自由者が、それぞれ教職員を含めて10名以上在籍している。

広過ぎるキャンパスの移動のために、またほとんどの学生が大学の近隣に居住しているという理由から、学生の多くが自転車を使用している。もちろん3、4年生になると自動車を所有する学生も増えてくるが、受講している授業数の多い1、2年生のキャンパス内での移動手段の主役は自転車である。そして、大学構内における交通障害者の最大の敵が、この自転車なのである。

広いキャンパスではあるが、人間が移動するスペースは狭く、しかも機能性よりも芸術性を重視したとしか思えないペDESTリアンの見通しはきわめて悪い。15分間の休み時間に最長3km程度の移動をこなさなければならない自転車軍団のスピードは、今の小学生に人気の「ミニ四駆」なみであり、またその数は中国の通勤風景のごときである。したがって当然、自転車同士、自転車と歩行者の衝突事故が多く、ケガ人も絶えない。

交通障害者も例外ではない。例えば、正面からすごい勢いで走ってくる自転車の気配を感じ、避けようとして歩道脇のヘドロ池に転落した全盲者、自転車の急ブレーキの音に驚いて転倒した全盲者、自転車と車いす使用者との正面衝突や追突事故、自転車のスピードと数の多さにおびえる盲導犬などである。特に、池へ転落した全盲者が相次いだために、大学は重い腰をやっと上げ、学内に点字ブロックがようやく敷設されることになった。当初から交通障害者の間では、「新しい安全設備が設置されるまでには数人の犠牲者が必要になる」という冗談半分の予想があったが、まさにそのとおりになった。

このように、交通障害者は通学や教室移動に、大げさに言えば生命の危機を感じているのであるが、忘れてはならないのは「無事に教室にたどり着く」のが目標ではないということである。すなわち、誰もが同じであろうが「効率よく、快適に、美しく」移動したいのである。全盲者は、講義棟の入口に乱雑に放置されている自転車を一台ずつ確かめながら、しかも倒さないように気を遣いながら、何度も何度も試行錯誤を繰り返してやっと入口にたどり着くのである。その時点で既に授業は始まっており、しかもクタクタに疲労し、さらには下ろしたての洋服は自転車の油で汚れてしまった(ただし、本人は気がつかず、後で友人に指摘されて恥ずかしさと悔しさで泣けてくるという) … という日常なのである。車いす使用者の場合には、放置自転車がじゃまをして教室にたどり着けないこともある。

例年ならば、夏休み明けには大学構内の自転車の数が減り、交通障害者が移動しやすくなる。その原因は、大学の授業に失望した新入生が授業に出てこなくなることと、夏休みのアルバイト収入で自動車を購入するからである。しかし、ここ2～3年は年間を通して自転車の数は減らない。これは不況の影響である。割のいいアルバイト先が減少しているのである。あるいは大学改革によって授業の質が向上し、学生の出席率が飛躍的に向上しているのだろうか。そう信じたい。

原稿受理 1998年3月26日